

教長古今集注について

— 伝授と注釈書 —

浅田 徹

一、はじめに

教長古今集注は治承元年（117）に藤原教長（当時すでに出家して観蓮と名乗っているが、便宜上俗名を用いる）が守覚法親王に對して行った古今伝授の記録である。勝命古今集序注に次いで古い古今集注釈書であり、俊成古今問答、顯昭古今集注・同序注と共に始発期の伝授の実態を窺い知るための重要な資料である。全文の翻刻も早く公刊されているが、いまだに内容的な研究はほとんど行われていない。本稿ではこの作品を扱うための基礎的な問題をまず処理し、次に注釈の性格の検討を通して、伝授という行為が注釈書に与える影響について考察したいと思う。

資料について述べる。教長注の伝本は現在京都大学に蔵される仁治二年（124）写の一本が知られるのみである。京大本は序から卷十七889注の途中までの零本で、吉沢義則によって初めて紹介された（藤原教長著古今集註）芸文4-10、大2・10）。佐佐木信綱がこれを影写し、影写本によって複製本をまず刊行（珍書同好会、

大5）し、日本古典全集『古今和歌集』（昭2。正宗教夫・与謝野晶子校訂）が付録として全文を翻刻する。次いで京大本原本から直接複製された複製が吉沢義則によって刊行された（貴重図書影印刊行会、昭6）。

京大本は後人識語によれば「安楽園」なる人物の書写か。仁和寺近辺で写されたものであると推測される。空押ししの罫界のある柙型粘葉装二冊本で、これは寺院で書写された書物にはよく見られる形態と思う。片仮名漢字交じりの写本で、一部に平仮名で書写された部分もあるが全体は一筆である。いくらか声点があり、当初からのものと推測される。

教長注は零本であるが、それを補う資料として顯昭の引用する逸文がある。顯昭は寿永二年（1183）に守覚に招かれて古今伝授を始めるが、それに先立って守覚から教長注を見せられており、顯昭古今集注・同序注に大量に引用しているのである。さらに袖中抄・古今秘注抄（顯註密勘の顯註）・柿本朝臣人麻呂勘文・顯昭本古今集勘物にも引用がある。特に京大本の失った卷十七後半以

降については極めて貴重な資料と言い得る。

顕昭所引本文はほとんど京大本と一致するが、大きな違いは仮名序に京大本に見えない注がかなりの分量存することである。

「ハナニナク鶯」「カクテゾ花ヲメデ」「アキノツキノヨゴトニサブラヒ」「タヨリナキトコロニマドヒ」以下計十一条が京大本に見えない（日本古典全集は逸文集成を兼ねているので見やすい。ただしいくら落ちてゐる逸文がある）。両者は同じ原本から出ているはずなのでこれは不審であるが、京大本が何かの事情で脱したものと考えられる（巻物の裏書などになつていたのでらうか）。また、京大本は何箇所かで落丁があるようである。仮名序冒頭（上巻1ウ／2オの間）、635注と646注の間（下巻23ウ／24オ）、675歌の後（27ウ／28オ）、827注の後（55ウ／56オ）、841注と851注の間（57ウ／58オ）に落丁が想定され、この部分に相当する逸文は物理的理由によつて京大本から失われたものであろう。これ以外の場所には注の出入りはない。

なお、一般に教長注が読まれるのは日本古典全集版によつてではないかと思われるので、同書について一言しておく。同翻刻は原本の片仮名の異体字まで忠実に再現しようとしており、極めて厳密な印象を与えるが、かなりの誤謬・誤植がある。（ママ）注記がある場合でも明らかに原本と異なつてゐることもあり、使用には注意が必要である。実際には原本でなく佐佐木信綱の影写本によつてゐる可能性もあるが確認していない。一方、顕昭古今集注・同序注から逸文集成を試みてゐるのは貴重である。ただし残念ながらいくらか集成漏れがあり、また袖中抄ほかに存する逸文

を扱わなかつたことも惜しまれる。

このほか、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（昭51）にも古注集成の対象として教長注が含まれ、注文のすべてを収載する。幾つかの箇所を見比べた限り、翻刻は日本古典全集よりも正確と思われる。しかし古今歌の本文は収載されていないので、教長注を読むという立場からは問題がある。本稿では原本からの複製である貴重図書影印行会版に拠り、便宜のために濁点・句読点を加えた。

二、成立の問題

教長注は教長が守覚に対して治承元年に伝授を行つた際の記録である。教長注自体には伝授の相手の名前は記されておらず、紹介者吉沢義則は顕昭などと推測したのであるが、このとき教長が書写して守覚に贈つた古今集証本の奥書が諸雑記に残つており、その文言と教長注奥書との一致から、守覚が対象であつたことが確認されたのである（その証本は現在諸家に分蔵される今切そのものであると一般に考えられているが、教長真筆と認め得るかどうかはなお議論がある²⁾）。

いま教長注に何箇所かある奥書と、諸雑記所引の古今集奥書から伝授の経過を辿ると次のようになる。

八月十九日 教長、古今集証本書写。

九月十二日 仮名序及び巻一―三を伝授。

十三日 巻四―六を伝授。

十四日 巻七―十を伝授。

二十三日 卷十一、十六を伝授。

二十四日 卷十七、二十を伝授。この後、証本を守覚に
献呈。

教長注はこの伝授に基づく注釈書であるわけだが、細かく見ていくとその成立は単純ではない。恐らくこの種の注釈書に共通する問題であろうと思うので、煩を厭わず論じておきたい。

伝授の場では師匠が証本を開き、弟子は自分の古今集を持って対面し、講義ノートが作られるのである。それが最終的に現在の形になる過程はどうだったのであるか。俊成古今問答は弟子側のその場のメモそのままの状態で伝存する。顕昭古今集注は完全に顕昭が注釈書として書き下ろしたものである。ところが、教長注はその中間的な形態を示しているのである。

まず、「講義ノート」的な性質を示す特徴を掲げよう。第一に、右の日程表でも分かるように毎日の区切りごとに奥書が加えられているのであるが、これは弟子（守覚）の付したものである。「謁教長入道親受訓説訖」（序）、「屈請教長入道決鬱蒙事」（卷三）、「相遇教長入道沙汰了」（卷六）の如くであって、弟子側のノートの形態と考えるほかはない。注釈書として献呈された顕昭注では「文治元年十月八日注進、重賜差声」のように顕昭の側から記されているわけである。

第二に、掲出された古今集の本文が、教長本である今城切と一致しない場合があることである。「時しもあれ秋やはきみがわかるべきあるを見るだに恋しき物を」（839）では今城切は「ときしまれあきやはひとを」の形であるし、「クレナキノフリデツ、ナ

クナミダ河タモトノミコソイロマサリケレ」（598）は「なみだには」であって一致しないなどの現象は、教長注が弟子の本文に基づいていることを示すであろう。

第三に、掲出された古今集の本文を教長が自分の本によって訂正する注が存在することである。第二の点と合わせ、教長が自ら書き下ろした注ならば決して起こらない現象と言い得る。いくつか例を掲げる。

・ ハルガスマチタイヅルヤイツクミヨシノ、ヨシノ、ヤマニ
ユキハフリツ、（3）

・ コノウタ、アマタノ本ノナカニヤウくアリ。ハナゾノ、本
ニハ「ルガスマタ、ルヤイツクミヨシノ、」トハベル。コ
レヲヨシトコソ讚岐院ヲホセラレシカ、クテハカケアヒテ
ヲボツカナキトコロモキコエズコソハ、ベメレ。

・ アサチフノヲノ、シノハラシノプトモヒトシカラメヤイフ
人ナシニ（505）

・ コレハ「人シルラメヤ」ナリ。「カラメヤ」ハヒガゴトナル
ベシ。…

・ ハナゴトニアカズチラシ、カゼナレバイクソバクワガウシ
トカハ思フ（464）

・ コレニ「マセナレバ」トカケル、ヒガゴトナリ。「カゼナレ
バ」トナリ。…

最後の例は掲出本文は「マセナレバ」とあるべきだが改められてしまったのだろう。同様の例は他にも見られ、「講義ノート」としての性格を明示している。

ところが逆に、教長自身の撰録と見なくてはならぬ徴証も存するのである。第一に、注の中にしばしば「注し置く」「シルス」という表現が見られることである。

・今通世後不審事等注置之ナリ。(序文)

・フルノナカミチハ、サキニモシルセルガゴトク(556を指す

―浅田注)、奈良ノ故郷ニ、ミナミヘユクミチノミツアルナ

カノミチナリ。:(679)

・カンナリノツボハ、襲香舎ナリ。ソノヨシ、ハシニシルセリ

(190を指す)。

既出の注に言及する場合はすべて「シルス」が用いられている。守覚側の筆録ならばこれは不自然な事である。

第二に、注の中に漢文による装飾的な記述が見られることである。二例掲げよう。

・ココニ梵語者天竺之唱、漢語者唐朝之称、和語者我国之詞、

雖依所異名、唯意趣惟同也。天竺世俗之文無伝、唯以經論察

山山矣。云仏云神、莫以和歌不通情。思古案今、為述篇什早

散憤。爰万葉集者、有実無華。古今集者、華実相兼。:(仮

名序末尾)

・然則以和歌戲論之奇語、翻蓋為菩提涅槃之良縁。況乎大日周

遍之戒香者、一春梅花之芬芳也。一色一番無非中道之故、豈

此議違哉。(47)

願文なども耳で聞いて理解できた時代とは言え、このような対句を用いた漢文はやはり自ら筆記したものと考えるべきであらう。

第三に、頭昭が古今集注の奥書で教長注を守覚に献せられた注

釈書と扱っていることである。

・文治元年十一月十七日、古今一部依梁園教命勘注了。:先是

宰相入道(俗名教長法名親蓮)被注献。賜件本、加披閱亂邪

正。仍多引載彼抄而已。

「被注献」という表現からは、教長注を書物として献呈された物と見る認識が窺えよう。

以上のように、教長注は二つの矛盾する性格を同時に有していることになる。これを調停するには、「守覚側の講義ノートを元に於て教長が改めて整理・清書した」という過程を考えるのが最も合理的であらう。おそらく守覚は自分の古今集に教長の講義を書き込みながら進むのであるが(一日の区切りごとに巻末に奥書を加えつつ)、そのようにして出来上がった注入り古今集をもとに教長が注釈書の形態に整理して(装飾的な漢文をも交え)改めて奉った物が現在の教長注の原本なのであらう。同時に自ら書写した古今集証本をも献呈し、伝授が完了したものと思う。証本奥書(諸雜記所引)に「件集(古今集―浅田注)歌一千九十五首悉以所伝之説々扠底聞食了」とあることから、教長注は本来全歌について記されているべきで、逸文を含めても326首分(と仮名序)しか存しない現在の形は抄出本なのではないかと疑う説もあるが(頭昭所引本文との食い違いがそのような想像を誘発する原因でもあったのだが)、読み上げるだけで終わった歌も多いだろうし、守覚(またはその侍者)がすべてをノートしているわけでもなからう。不自然はないと考える。

右のような成立を考えると、教長注がどれほど伝授の場のやり

取りを伝えているのかは分からないということになるが、実際にはかなりよく当座の雰囲気伝えていたのではないかと想像する。このことについては次節の末尾で再度触れたい。

三、解釈の姿勢と伝授の場

院政期には多くの歌学書が書かれたが、教長注をそれらと比較しながら読んで行くと、ある種の違和感を生ずる場面にしばしば遭遇する。例えば、次のような注（それぞれ全文である）をどう理解したらよいのだろうか。

・ フキマヨフノカゼヲサムミアキハギノウツリモユクカヒトノ心ノ (781)

カゼノサムケレバ、ギモウツロフヤウニ、ヒトノ心モナリヌルカトヨメリ。

・ ワビヌレバシキテワスレムト思ヘドモユメテフコトゾヒトダノメナル (569)

コヒワビヌレバ、サラバタバワスレナントヲモフニ、ユメニアフナドミツレバ、マタ、ノモシクテ、ワスレムノコトモヲボエズトナリ。

・ マツノモコヌモノユヘニウグヒスノナキツルハナヲ、リテケルカナ (100)

マツノノキタラムニミセントテハナヲリタルニ、サモナケレバ、ウグヒスモヲシミガホニナキツルモノヲ、ナニセンヲリツラムトクユル心ナリ。

最初の例はほとんどそのまま口語に置きなおしたものでしかな

く、後の二つも歌の婉曲な表現を直線的に言い換えたものにすぎない。清輔や顯昭の突っ込んだ注に比べて余りにあっさりした注のあり方に、食い足りなさを覚えずにはいられなくなる。しかし教長注ではこの種の注が非常に多くを占めているのである。

そもそも、院政期の歌学書の注釈は歌語の「難義」を説き明かすのが普通であり、右のように一首の意味や作意を説明するものではなかったはずである。こういった「口語訳」的発想、「評釈」的発想は何に起因するのだろうか。従来この問題に触れた論者は二つある。

まず山口明穂は、教長注の「口語訳」的な注について、国語史的立場からの解釈を示している⁵⁵。すなわち、論理的な繋がりが明確であるような散文表現が普及するにつれ、和歌的文脈と思考の流れとが一致しにくくなり、散文による平明な解きほぐしが必要とされるようになってきたことの現れと見るのである。

一方、佐々木八郎は平安歌学における注釈学の発展の過程を構想する⁵⁶。佐々木によれば、個々の単語中心だった注釈学が、次第に一首の歌全体を視野に入れるように発展していく過程があるのであり、教長が一首の意味や作意を説くのは歌学が単語主義を脱して表現の内面を味わう次元を目指し始めた事の現れと捉えられると言う。

これらの議論は、それぞれの論者の学体系的の中では有意義なものであるが、なぜ教長注に至ってそれまでの歌学書とは違う注釈態度が出現するのかを説明するものではない。和歌的文脈は教長の頃に急激に分かりにくくなったはずはないし、そもそも教長

が「口語訳」的にたどりなおしている歌はどれも理解に困難を感じない歌と言ってよいのである。注釈学的見通しも、なぜ個々の単語中心の立場から「発展」せねばならないのかが示されなくては説得的とは言えない。実際の所、頭註密勘などを見て、この時期になって「難義」を含まない歌の作意をめぐっての議論が行われるようになってくることは確かだ、佐々木の指摘には傾聴すべき点があるのだが、やはり問題はその動因である。

実は、「集全体を細かに読み聞かせる」という伝授の形態が、この種の注を生み出すのではないだろうか？ 古今伝授発生以前に、特別「難義」を含まないような和歌が一首一首解析されるような教授・学習の場は存在しなかったであろう。もし古歌が詳しい議論の対象になるとすれば、それは歌人が自作にその表現を取り入れる為であり、古歌は素材ないし典拠としての価値において眺められるのが通常であつたと思われ。ところが伝授ではそれぞれの歌を利用の観点から眺めるのではない（そういう注釈がないわけではないが）。伝授においては単なる「鑑賞」行為自体が制度化されているのであり、師匠による「口語訳」「評釈」的態度が前面に押し出されてくるのはそのためだと考えられる。

さらに詳しく考えてみよう。次のような例はどうであろうか。

・ 人ハイサ心モシラズフル里ハ花ゾ昔ノカ、ニホヒケル
(42)

コノウタニハ心ミナコトバニアラハレテ、カクレタルトコロ
モミエズ。コトバニ「カクサダカニナンヤドリハアル」トイ
エル、ヒサシクキタラヌヲウラミテ、タガハズヤドハアリト

イヒタルヲ、「ヒトハイサ」トヨメルナリ。マコトニ、シカ
アルベキコトニナム。

「宿は変わらぬにあるでしょう」という亭主の言葉に対して貫
之が「人のほうはどうだかね」と言い返す初句を「本当に、そ
うもありそうなことですね」と教長は評している。あるいは、

・ ヤヨヤマテヤマホト、ギスコトヅテムワレヨノ中ニスミワ
ビヌトヨ (152)

ホト、ギスハシデノヤマノトリトイヘバ、カシコニアラン
テ、ハハナドニカクイヘ、トヨメルナルベシ。イトゞ心ボソ
クアハレナルウタナリ。

ここでも歌の意味を一通り解説した後には、「実に哀切な歌で
す」という評がついている。数は少ないが、こういった発言はこ
れ以前の歌学書にはまず現れないのではないか。作品に対して
「本当にそうだなあ」と同感しても、注釈者の学識を示すことには
ならないし、利用者にとって特に必要な記述とも言いにくい。
これも伝授の場における師匠の「語り掛け」によつて生ずるもの
だと考えられる。師匠は弟子に向かって「本当にそうですね」と
か「哀切ですね」などと語り掛けることで、弟子の共感を求める
のである。

・ イザ、クラワレモチリナンイトサカリアリナバ人ニウキメ
ミエナム (77)

コレハ、「サクランノイトメデタクサカリナル、ツキニカクテ
モアラジ、ウキメモゾ人ニミユル、ヤクナシ、チリナン」ト
ヨメリ。盛者必滅ノ理ヲヨメルナリ。

カハツナクキデノヤマブキチリニケリハナノサカリニアハ
マシモノヲ (125)

「ヤマブキノチリテノ、チキデニキタレル、クチヲシ。ハナ
ノサカリニコソコントヲモヒシカ」トクヒタルナリ。

・ タラチネノヲヤノマボリトアヒソフル心バカリハセキナト
ゞメソ (368)

タラチネトハヲヤヲイフ。「コノハルカナクニ^マヘイタルガヲ
ボツカナキ、心ハマボリトナルラム、コレヲバセキナリトモ
トゞムナ」トセチナルヲモヒヲヨメリ。

・ ヲク山ノスガノネシノギフルユキノケヌトカイハムコヒノ
シゲキニ (551)

「スゲノネノシゲキヤウニ、コヒモシゲシ。ユキノキユル
ヤウニ、ワレモコヒニキエナンス」トヨメルナリ。

この種の注は非常に多く、教長注の基本的な方法と考えること
ができる。教長は作中主体になり代わり、歌の抒情をもう一度直
接話法でたどり直し（右の引用ではわざと括弧で括つておいた）、
『……』トヨメルナリ』で結んでいる。そして、それ以上のこと
は何もないと言ってよい。

この作業によつて分からない歌が分かるようになるかどうかは
疑問である。注釈が、それまで見えなかったことを切り開いてみ
せることであるとすれば、これらの注は水準の低いものと言わね
ばならないが、恐らくこれらは守覚としても「教えてもらわねば
分からないこと」ではなかつたであろう。言つてみれば、教長は
ここで歌を再話（あるいは再演）しているのであり、それを同時

に守覚が心中で追つていくことで、一首の歌が体験し直されるこ
ととそのものが重要だつたのではないか。歌は抒情である以上、そ
の享受は作意に対する共感を中心とするが、教長は守覚に対して
情緒を込めて歌を再話することで、共感の導き手となつてゐるの
である（これは現代の大学等の教育現場でも恐らく事情は変わら
ないはずである）。実は、先に「口語訳」的な注と称しておいた
ものはすべてこの種のものである。教長にとつて重要だつたのは
「訳する」ことではなく「語り直す」ことであつた。

・ ワリナクモネテモサメテモコヒシキカ心ヲイヅチヤラバワ
スレム (570)

「ヲキフシニコヒシキ心ノワビシキヲ、イツチヤリテコレヲ
ワスレム」トセメテノ心ナリ。

・ イノチヤハナニゾハツユノアダモノヲアフニシカヘバヲシ
カラナクニ (615)

「イノチヤ、ソレハツユノゴトクニアダモノナレバ、アヒガ
タキ人ニダニアヒナバ、ソノ、チハシナンモヲシカルマジ」
トヨメリ。コヒノ心ノセチナルナリ。

・ シタニノミコフレバクルシタマノヲノタエズミダレム人ナ
トガメソ (667)

「タマノヲハイノチナリ。「コレガ絶モイカマセム、カバカ
リヲモフ事ナレバ、人モナトガメソ」トセチノ心ナリ。

「セチノ心」「セメテノ心」を感受させようとする注は他にも
いくつも見える。感嘆文や呼び掛けを含む表現の強さを指摘して
いることにはなるのだろうが、いったん作中主体になり代わつて

歌を再話した後に「……という切実な心情なのだ」と語り掛けるのは、結果として守覚により強い心情的同化を要求することになるのだろう。弟子は師匠の促しに応じてより深く歌に対して心を開いて行くのである。

以上のような特質は、すべて師匠と弟子とが対面する伝授の場の特性に発していると考えることができる。師匠は弟子と、歌を介して向かい合い、弟子を歌の抒情に導き入れるために表情豊かな語り手となり、あるいはより深い心情的同化を要求する。そのような働き掛けによって弟子は通常自分だけで古今集を読んでいる時よりも「より深く歌を味わった」と感ずるのである。

もちろん、こういう事柄は一人一人の師匠により、また弟子により、様々なヴァリエエティがあるはずであって、「難義」についてしか述べることのない師匠もあるだろうし、弟子によって聞きたい事も違うであろう。伝授の場でどちらが主導権を握っているかによっても相違があるはずである。教長は弟子の「鑑賞」行為に深く介入する（あるいは、共に歌を体験しようとする）傾向の強い師匠であったのだと推測される。いずれにしても、教長注がそれ以前の歌学書と違っている点は、教長自身の語り掛ける身振りが弟子によって写しとられていることであると結論しておきたい（従って、筆録者のメモの取り方も出来る上がる注釈書の質を左右するわけである）。教長注は教長自身による整理を経て清書されたものではあるが、なお講義の場の様子はよく保存されていると認められるのである。

四、語られる構造

教長注に多い「再話」的な注を考える上で、次のような例は興味深い。

・ ユフツクヨサスヤヲカベノマツノハノイツトモワカヌコヒモスルカナ(490)

「イツトモワカズ、ツネニコヒス」トイハントテ、マツノトキハナルニタトエテ、ヤガテ、マツハヲカナンドニヲイタルモノナレバ、カクヨミテ、ユフヒノサスヲカトイヘリ。フルキウタノヤウハ、カクモノヲトリヨセツ、ヨメルナリ。

・ ヲモヒイツルトキハノヤマノイハツ、ジイハネバコソアレコヒシキモノヲ(495)

コレモ、「ヲモヒイツルトキハ、コヒシキ」トイハントテ、ヤガテ、「トキハノ山」トイヒテ、「イハツ、ジ」ト、リテ、「イハネバコソ」トツタハリテ、ヤガテ「コヒシ」ト、チムルナリ。

要するに序詞・掛詞の説明である。佐々木八郎はこれらに注目し、「こういうように、一語の釈義にばかり偏せず、全体としての歌意を端的に明らかにすることに重点を置き、それから、更に歌の分析にかかって、序や懸詞の如き技巧的なものに触れたのであって、この一首の歌意を重視して歌の通釈を付したことは、特筆して置かなければならない」と高く評価している（前掲稿）。どちらの例でも教長はまずその歌の主旨を掲げる（「イツトモワカズ、ツネニコヒス」「ヲモヒイツルトキハ、コヒシキ」。そし

て、歌人はその主想を「イハントテ」、いろいろな「モノヲトリヨセツ、」一首を仕立てているのだ、と説明しているわけである。

佐々木は教長が歌の主想を端的に提示してから技巧に説き及ぶのを事の軽重に適った処置として評価するのであるが、本稿の示してきたところからすれば、このような順序になったのは教長が弟子に向かって歌を再話しようとしていたからで、まず作中主体になり代わって抒情する事が必要だったのであろう。ところが右のような序詞形式の歌では、単に主想部分のみを語っても序詞部分が大いに余ってしまう。そこで続けて「モノヲトリヨセ」る過程が説明されることになったのである。

教長や守覚にとって序詞形式が難解なものだったはずはない。守覚自身の作例は（恋歌がほとんど伝存しない歌人なので）見出だせないが、教長には多くの作例があるし、様式として古さは感じさせたとしても、理解に苦しむものではなかったろう。従ってここでも重要なのは、教長の説明に随って守覚が歌の構造をたどり直すことであつたと思われる。

問題はそれたどり直しの方法である。右の引用に所々傍線を付したが、「ヤガテ」という語が頻出することと、「ツタハル」という見慣れない説明語彙があることに注意したい。これは教長注の他の部分にも見える。

・ ミヨシノ、ヲホカハノベノフチナミノナミニヲモハハワレ
カヒメヤハ (699)

…「ナミニヲモハハ」トイハムタメニ、「フチナミ」トイヒテ、ヤガテ「大川ノ辺」トカミザマニツバクルナリ。…

・ ワガセコガコロモハルサメフルゴトニノベノミドリゾイロ
マサリケル (25)

コレモ、サキニノブルガゴトク、「コロモハル」トイヒテ、ヤガテアメニナシテ、「ノベノイロマサル」トヨメルハ、サダマレルフルマイナリ。

・ アツサユミヲシテハルサメケフ、リヌアスサエフラバワカ
ナツミテム (20)

…ヲホヨス、フルキ哥ハ、カク「ワカナツマム」トイハムトテ、ヲモヒモカケヌ「アツサユミ」トイヒイデ、「ヲシテハルサメ」トツタハリクダスナリ。…

・ カラコロモタツヒハキカジアサツユノヲキテシユケバケヌ
ベキモノヲ (375)

…「タツ」トイハントテ、「カラコロモ」トヲケルナリ。…
「ヲキテシ」トイハントテ、「アサツユ」トヲケリ。「ツユ」トイヒツレバ、「ケヌベキ」ト、カクツタエユクヤウニ、フルキウタハミナヨメルナリ。

「ヤガテ」は「そのまま」「ただちに」の意であろうが、素材の取り添え・別語への取り成しが間髪を入れず行われて行く印象を与える。歌が出来上がっていく間の諸行為の連続性を強調する表現と言えよう。「ツタハル」は「ツタハリクダス」「ツタエユク」の形でも現れるように、歌語同士の縁を、歌人が一気に詠み下していく流れの中で捉えようと意図した表現であると思われる。教長の説明は、最初に提示される主想から次々に展開する流れ・運動の結果として一首の構造を語ってしまおうとするものなので

ある。

守覚は教長の説明に随いつつ、詞が次々に成長する様子を同時にたどり直して行くはずである。教長は歌の構造を流れとして擬似的に再構成することで、弟子がこれを体験することを助けているのである。

以上、本稿では教長注を対象に、まずその成立について整理し、ついでそれが伝授という行為に立脚していることによる特異な現象について考察した。教長注については、教長がいかにして伝授の権威を作り出していたかという面でも非常に興味深い問題があるのだが、それについては稿を改めたい。

注(1) 日本古典全集では115・509・634の各注が京大本に見えないものとして補われているが、これらは認定の誤りでそれぞれ404・510・995の注である。結局京大本と頭昭所引本文との出入りは仮名序に限られていくわけである。片桐洋一は両者の不一致からそれぞれに違つた伝授記録である可能性を示唆した(『和歌大辞典』当該項)が、諸雑記引用の教長本古今集奥書との符合を考えればそこまで疑う必要はない。

新刊紹介

雨海博洋・神作光一・中田武司編

『歌語り・歌物語事典』

本書は表題からも明らかであるように、歌語り、歌物語の事典であり、『総論編』『文献編』『索引編』の三部から成る。

『総論編』『歌物語作品』では、伊勢物語・大

なく、仮名序部分に何かの事情を考えれば足りるものと思う。
(2) 最近の整理として、笠嶋忠幸「研究資料 伴大納言絵巻の詞書」(出光美術館研究紀要1、平7・7)が挙げられる。

(3) ただし、ここから逆に「注釈」を伝授と同義に使用し得るのだとする見解もある(西村加代子「頭昭の古今伝授と和歌文書」国文論叢12、昭60・3)。

(4) 野村八良「国文学研究史」(大15)、岩橋小弥太「藤原教長」(国語と国文学30-12、昭28・12)など。

(5) 「中世和歌とことば」(築島裕博士還暦記念国語学論集)昭61)。なお同氏「中世国語における文語の研究」11頁以下にも言及がある。

(6) 遺稿「註釈における学の発展」(『中世文学の構想』昭56所収)。

〔補記〕

本稿は平成八年四月の和歌文学会関西例会(於・大阪青山短期大学)での口頭発表の前半部に当たる。会場にてご教示を頂いた諸先生方にこの場を借りて御礼申し上げる。

なお、口頭発表後に西村洋子「藤原教長論——『古今和歌集註』の検証を中心に——」(仏教大学大学院紀要24、平8・3)を知った。教長注の本格的な分析としては始めての論文であるが、本稿ならびに口頭発表の論旨と抵触する所はないようである。

和物語などのいわゆる歌物語と称せられる作品を関係項目ごとに解説。『文献編』では、伊勢・大和・平中・多武峰少将物語・一条摂政御集・篁物語の、伝本・注釈書・研究文献目録を掲載。歌物語研究にとって必備の書である。

しかし「歌語り」「歌物語」の発生から展開・継承までを系統化することを方針として編まれた本書は、各事項を解説、網羅する単なる事典にとどまらない。

『総論編』『歌語り・歌物語の発生と展開』古

典作品にみる歌語り・歌物語性』では、「歌語り」「歌物語」の流れをたどることができ、和歌と散文の関係性がいかに根深く、かつ多様なものであるかを改めて実感させる。特に後者は、その対象が記紀・万葉から中・近世の作品にまで及んでおり、多くの研究者にとって、示唆に富む一書となることであろう。

(平9・2 勉誠社 菊判 六六六頁 一五七五円) (小林真紀子)